

## 江戸後期の医学の場合——幕府医学館の学績を中心にして——

町 泉寿郎

### 従来の研究動向

江戸時代の学芸に関する研究動向を振り返るとき、江戸後期の考証学の研究は従来必ずしも盛んとはいえたかった。

儒学史研究における古学派が、朱子学に代表される新儒学に鋭い批判を開いたとして評価されるのと、ある程度まで相似するであろう——、中国医学の日本化された姿を示すものとして明確な意義付けをされるのに対し、考証医学に対する評価ははるかに不明瞭で不安定なものである。

さらに、医学の場合、医療現場での臨床的意義が歴史的意義に優先するのはある意味でやむをえないことであり、この点でも（『傷寒論』を中心とした）古典の臨床応用に主眼を置くものが多いため古方派の著述が、煩瑣な名物考証の充満した考証学派の著述よりも、漢方診療の現場から歓迎されてきたことも看過できない。

一方、研究の視点を個々の医学古典に移すとき、考証学で科学導人に先駆ける実験精神がその主張の共通基盤として看取される点で評価され——こうした事態は、おそらく

派の業績は、本草書の復元（『本草經集注』『神農本草經』など）、伝本の書誌学・目録学的検討（『經籍訪古志』『医籍考』『医籍著録』など）、詳細妥当な古典注釈（渋江抽斎『靈枢講義』、森枳園『素問攷注』『傷寒論攷注』『本草經攷注』など）によって、今なお研究基盤とするに足るものが多く、この点では古方派（古学派の多くも同様である）の古典解釈の多くが恣意の説りを免れず、従うべき見解が少ないと対照的である。

よつてここに、研究対象と研究方法にまたがる、「思想の学」と「書物の学」の間にある乖離が指摘できそうである。

かつて金谷治は日本の考証学研究低調の理由を「それが清朝考証学の亜流であり」、「陳腐な古典学として新しい思

想とは無関係だと見られたからであろう」としながらも、その見方を否定して、考証学に「自覺的な形での科学的精神性の開花」を認めた（『江戸後期の比較文化研究』「日本考証学の成立」、一九九〇）。

ここでは結論を急がず、考証医学の最大の拠点となつた江戸医学館を取り上げて紹介し、江戸後期考証学の歴史的意義を考える契機したい。

筆者は考証学が江戸時代において儒学よりも医学分野においてより広範かつ高度な成果を挙げたと考えるものであるが、その検証は紙幅の制約もあるので別稿に譲りたい。

### 考証医学成立の過程

今日、江戸後期の考証学がたとえ新思想から遠いと評価されようとも、当時において彼ら考証学者の意図が江戸中期の古学・古方の方法論的超克にあつたことは無視できない。古学・古方が後世の理解を排して原典に溯上し聖人・名医の学術に肉迫しようとした運動が明らかにしたものは、古代像ではなく、一致を見ない個人の見解と原典到達の不可能ないし困難ではなかつたか。ここに古典を扱う技術上の自覚が促され、書誌学・校勘学が次第に形成されたと考えられる。

幕府医学館について言えば、開設（明和二年一一七六年）当初、幕府医官たちには、古方派のなかでもとりわけ天命説・万病一毒説などの過激な医説によつて医壇に賛否を巻き起こした吉益東洞に対する反発が強かつた（望月三英『賀躉壽館落成序』）。医学館開設の一因には、京都古方派の興隆に比して江戸の医界を低調と見る現状認識とその振作の意図があつたと見られる。

さらに創設者多紀元孝（一六九五—一七六六）および学事顧問として参画した折衷学者井上金峨（一七三三—一七八四）の意図には、医学を小技と蔑視する通念を破り、詩書礼楽

によって彝倫を説いた堯舜文武孔子の儒学に対して、医学を陰陽五行によって疾病を説いた伏羲神農黃帝の教えと定義し、儒・医を対置させ、昌平坂学問所に並ぶ幕府機関としての權威と意義を医学館に付与することにあつた（『医学館経営記』）。これは医学の側の自己規定であるが、こうした学問領域の専門化・独立化の促しにより、儒学自身も改めて自己規定を迫られることになり、そのひとつの表現が正学派朱子学と呼ばれるものであつたと見ることができるのではないだろうか。

次に前述の、古学・古方から古典解釈の技術的精鍊へと進むという内發的因素のほかに、清朝考証学との関係は無視できない。考証医学の形成に大きな足跡を残したのは、井上金峨に学んだ多紀元簡（一七五四—一八一〇）である。荻生徂徠のような儒者や山脇東洋のような医者を問わず、荻生徂徎の学問形成を考慮する場合と、多紀元簡やそれに続く考証医学者たちの場合とのひとつの相違は、後者の考証学が清朝の学的成果をいつの時点でどの程度知りえたかという問題に関心を払う必要が、前者の場合よりも高い点にあるように思われる。これは一七一八世紀の中国において明学から清学へ学芸思潮の質的転換が起きたことと密接な関係がある。江戸時代の学芸は中国との関係に限つて言えば、基本的には明学の影響下にあつたと見てよいものであ

り、江戸幕府と時代的により多くを共有した清朝の学芸の影響は限定的なものにとどまつた。

清学が学問を大きく変えつつある予感は那波魯堂『学問源流』（一七九九刊）にも見られる。しかしながら、清朝考証学の日本到来本格化が西暦一八〇〇年前後と見て、それから明治維新によって西洋に舵を切り替えるまでに約七年間、すでに西洋を射程にする人も漸増し中国の影響度は全体として低下している。そうしたなかで清学受容の具体相についての研究はよく対象を選ばなければならない。

井上金峨には清朝考証学の影響は殆ど感じられない。多紀元簡には朱彝尊・錢曾・紀昀らの学業に対する高い関心が見られる（たとえば朱彝尊『經義考』に倣つた『医籍考』——元簡の子元胤の遺著を元胤の弟元堅が完成——も元簡在世中に構想着手させていた）。続く多紀元堅はいわゆる乾嘉の学の成果を当時としてよく收集している（『存誠藥室藏書目』）。多紀氏を中心とした医学館の考証学者は、江戸時代の清学受容史に恰好の材料を提供するものである。

### 医学館の歴史的概観

#### ①濫觴時代（一七六五—一七九二）

多紀元孝の請願が聽許されて神田佐久間町（現名も同じ）

に医学館（躋寿館）が半官半民で開設されたのは明和二年（一七六五）のことである。学制・機構の制定に儒者の井上金峨が参与したほか、金峨門系の儒者（亀田鵬齋・大田錦城・吉田纂穀・岡部四溟ら、後に異学禁令によって指弾される者が多い）が儒学講師として関係した。元孝の嗣子元惠は、典薬頭らの妨害や資金不足に苦しめつつも教育課程（百日教育—毎年二月中旬から五月下旬までの百日間に限り開講）を維持し、医官としても昇進して発言力を増す。元惠の子元簡は学識に優れ、新鮮・精確な医学を講じた。医学校としての実績と権威は次第に高まつた。

## ②官立化当初（一七九二～一八一〇）

官立学校における教育・選抜によって幕臣の官僚組織化をめざす松平定信の下で、昌平黌に先んじて直轄医学校に改組され（一七九一）運営安定・講義拡充（通年開講・新教官招聘）をみ、文献的に価値の高い古医書の出版も活性化した。昌平黌が主に幕臣一般を対象とした基礎教育の場であり、試験の際のテキスト選定の意味からも朱子学系のテキストの学習を主眼としたのに対し、貴人の生命を与える優秀な医療技術者の養成を目的とする医学館では、学派を限定せず広く歴代医書に通曉することが求められ、異学禁令に掣肘されずに考証学の学統を形成してゆく。ただし人員

の面では、医官以外の出席が制限されたため、多紀氏を始めとする講師の門人や折衷派儒者が排除されることになり、官立化による負の面もあらわれた。焼失後（一八〇六）、下谷新橋通向柳原（現台東区浅草橋四丁目）に移転し、幕末にいたつた。

## ③多紀元簡没後（一八一一～一八四二）

館主多紀元胤を補佐して、杉本樗園（松宮柳圃・山本北山門）が重立世話役となつて実権を握つた。文政期は資料も少なく、一種の停滞期と見られる。一方、化政期には多紀元堅・小島宝素らは狩谷祓斎の書誌学検討会（求古樓展観会）に参加していることが知られており、この時期の考証学・書誌学の研鑽の場が知られる。杉本致仕（一八三六）と相前後して多紀元堅・喜多村直寛・小島宝素らが講師を拝命し、次第に幕末期の考証医学を牽引する人員が整つた。

## ④天保の改革以降（一八四三～一八五六）

天保の改革の一環として、医学館活性化のために医官子弟のための寄宿寮新設と、官立化以後排除されていた陪臣医・町医の出席許可がなされた。伊沢蘭軒・多紀元堅門下をはじめとする有能な人材が陪臣医・町医のための別会講師となつて医学館に吸收され、古医書の文献考証に成果を

上げた。

### ⑤多紀元堅没後（一八五七～一八六八）

実力者元堅の喪失と西洋医学所の開設により、医学館の幕府医事における影響力は低下する。そうしたなかでも、講義・臨床実習・薬品会などの教育・研究活動は瓦解直前まで継続されていた。また幕末には海保漁村が儒学講師となつた。漁村の学問・藏書を継いだのが島田重礼（帝国大学文科大学漢学科初代主任教授）であり、この意味では医学館の学統・学風は明治近代の学術と接点を持つている。

### 考証学成立の条件

#### 文献の収集

医学館蔵書は明治維新の散逸（『躋寿館医籍備考』浅田宗伯序）を経てもなお国立公文書館の漢籍・子部医家類の大半を占める。同館目録に見るとおり、旧医学館蔵書は多紀本家・分家のほか小島宝素・吉田意庵・曲直瀬養安院・野間三竹・桂川甫周・望月三英らの蔵書を含み、多紀氏ひとりの力ではなく、幕府医官たちの家伝の古医書を集約して形成された。文献収集の動きは更に尾張藩医浅井氏や京都の諸名医家との情報交換・文献共有へと拡大し、幕末までに

全漢籍善本と慶長以前日本医書の主要諸本の調査はほぼ終了して、その結果が小島春沂『医籍著録』『古卷聞見録』『皇国医籍目録』として残されている。

#### 個人蔵書の形成

旧医学館蔵書と関連の深い、小島宝素（一七九七～一八四八）家蔵書の大部分と多紀家蔵書の一部が清国公使館員楊守敬（一八八〇来日）に購求され、台灣故宮博物院に現存する。宝素蔵書の特色は一口に善本古医書といつても宋・元版や古鈔の原本が多いというより、その忠実な影鈔本が多い点と、諸本と校讃した書入れが多い点に求められる。

これは次のことを物語る。一つには宝素の周囲の善本所有者の存在。一方的な貸借関係ではなく、同好者が相互に架蔵本を交換し影鈔しあつたものと見られる。収書家のネットワークが小島宝素の良質な蔵書が形成した。

二つ目は、諸本との校讃は定期的に複数人によって継続的に行われており、文献研究の基礎作業となつた読書の実態が知られること。著作の寡ない宝素の如き人物においては、この校讃作業が学的営為の非常に大きな部分を占めたに相違なく、この校讃の跡に目を塞いでしまうならば、幕末考証医学の一翼を担つた宝素の学績の大半を看過してしまうことである。

### 良質資料と新刊研究所の兼備——「書物」の地域間格差

医学館の考証学者による情報蓄積とチームワークの力を示す文献調査の一例を挙げよう。小島宝素は天保十三年の秋冬、京都の名医・古刹に所蔵する古医書文献を調査・収集した。これ以前に多紀元簡・多紀元胤・狩谷棟齋・浅井貞庵らの先行調査があり、この時はその拡充・補完の意図の下に行われた。調査に当たり宝素は、多紀氏その他の蔵書目録を携行し、かつ江戸の多紀元堅らと書信による連絡を取り、校合に必要な書物の郵致依頼などをしつつ調査を進めた。一方、多紀元堅の別荘には渋江抽齋らが定期的に参観して古医書の書誌的検討を行うサークルを持った（後年『經籍訪古志』として結実）。江戸の知友が宝素の京都訪書を後援していた構図が明らかである。

この調査は現国宝・重文指定の名品を多数含むのみならず、内經・本草研究上に画期的な資料発掘の成果を上げた貴重な機会であったが、同時に宝素の書信からは京都の蔵書家と江戸の考証学者の風土の相違が知られる。さすが歴史ある京都の蔵書は、宝素をして驚目せしめた。前代からの蓄積の力である。しかしながら蔵書家が自分の蔵書の目録学・書誌学的価値に無知であり、宝素の教示によつてそれが分かり喜んでいる、また京都の蔵書家が普段、

蔵書を相互に秘匿しているので、宝素の調査を相手の蔵書開示の好機ととらえて歓迎している、既藏分に通曉するだけで満足し、清朝の新刊書などには関心が薄い、などと宝素は多紀元堅に伝えている。

幕府医官が新渡書を元値で優先的に購入することは、望月三英に発し多紀氏に引き継がれたと見られる。乾隆・嘉慶期の清学の研究方法をいち早く導入し、かつ佚存資料などの研究素材を兼備している点で、古医書研究の上、江戸医学館は特異的に恵まれた環境であつたといえる。

### 文献調査結果の還元

収集された資料が文献研究に活用されていたことも特筆に価する。文献調査の進捗に応じてテキストおよび解釈は不斷の修正を加えられ、最新の研究成果が教育現場で提供されていた。たとえば文政・天保にかけて『新修本草』『黃帝内經太素』（仁和寺蔵 佚存書）が資料発掘されたことにより、それまでの多紀元簡『素問識』『靈枢識』を補訂した多紀元堅『素問紹識』・渋江抽齋『靈枢講義』・森枳園『素問攷注』がつくられ、小島宝素・小島春沂・森枳園による古本草の復元が試みられ、これらが医学館において講義されていた。

こうした事態は、朱子学正学派を官学として標榜した昌

平賀の講義が、どちらかといえば十年一日の如くに見えるのと対照的である。

(北里研究所・東洋医学総合研究所研究員)